

『徒然草』にみる吉田兼好の人と思想

小 倉 修 四 郎

徒然草を本格的に読みはじめたのは、いまから数年前のことである。たまたまイギリスの詩人イエイツの『動搖』という詩を読んで次のような一節に遭遇した。「死ぬための準備をはじめろ。四十歳の冬をこしたら、この考えをもとにして、知性や信仰の仕事をつとつとつ吟味してみろ。」という一節であった。

そのとき、たしか吉田兼好が同じようなことを言っていることを思い出し、徒然草を読みはじめたのである。それは第七段でふれられていて、「命長ければ辱多し。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」と書かれている。命が長ければ、それだけ恥をかくことも多い。ながくても四十に足らぬくらいで死んでゆくこそ見苦しくない生き方であろう、というわけである。

この第七段をじっくり読んでみて、それ以来徒然草の底知れない「思想の深さ」と「澄んだ美しい文体」に惹かれていったのである。

小林秀雄は、「徒然草を遠近法を誤らずに眺めるのは思いの外の難事である」と言っている。どうして徒然草

を読むことがそれほどむずかしいのかは、徐々にわかってきたのであるが、そのことについては後でのべることになる。

ところで、吉田兼好とはどういう人であったのだろうか。兼好は鎌倉末期南北朝つまり十三世紀から十四世紀の半ばまでを生きた人であるが、実は兼好の経歴には不明な点が多い。しかし、私は、兼好は京都の神官の家に生まれたこと、北面の武士であったこと、四十二・三歳の頃出家して横川に隠棲したことぐらいを知っていれば充分だと思っている。たしかに林瑞栄氏が『兼好発掘』という著書で、兼好は関東出身であるという説を展開されておられるなど、兼好の経歴をめぐって、解明されていない多くの謎があるのであるが、私自身にとっては、むしろ徒然草という作品のみを通して、兼好の人間像をイメージネーションでつくりあげていくことの方が楽しみである以上、この問題にはこだわらないことにしている。

兼好の出家の動機についても、くわしいことは知られていないが、いわゆる求道という立場から出家したものと推察される。

兼好は、鴨長明や西行のあり方について、徒然草のなかで批判している。第五段では、「不幸に愁にしづめる人の、頭おろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、有るかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。」として、逆境に思いつめて出家するような態度をよしとしていない。また第十段では、西行を直情径行な人間としてとらえ、兼好の多面的な視点と反省的な態度を対置している。従って、兼好の出家の動機は、どうやら厭世あるいは立身出世ができなかったことへのうらみ、あるいは西行のように失恋によるものではないことはたしかなようである。

さて、兼好は、徒然草を通してみて、非常にバランス感覚に富んだクールな人であったということがわかる。そして、物事を相対的にながめ、作品のなかに自我を出さない、自己コントロールのよくきいた人であったということも言い得ると思う。反面作品そのものが場所によって矛盾しているところもある。

たとえばあるところでは恋愛や酒を否定してみても、別なところでは恋愛を肯定し、酒の効用をのべたてるといったように。しかし、その矛盾の上に立った兼好、それがまた兼好の魅力の一つにもなっている。本居宣長は『玉勝間』のなかで、兼好は「からごろ」におかされている、物の見方が一面的であると批判しているが、兼好がそのような一面的な人間でないことは、いままでのべてきたこと、またこれからのべることによって知られるこ

とである。

兼好の思想が道元の影響をうけていることは常識となっているが、生き方においては相違があった。道元は師如浄に、決して権力者には近寄るな、深山幽谷に入れと言われ、それを忠実に履行したのであるが、兼好はその逆を行っている。つまり、兼好は結構顕官貴人との交流があったし、庶民との交際もあったことが、作品によって語られている。

このように兼好は出家遁世したとはいっても、まったく世間との接触を絶ってはいないし、かなり安楽な生活をしていたようである。

鴨長明の出家後の悲惨さは、おそらく堀田善衛の『方丈記私記』で描かれているとおりであつたろう。また、陶淵明は「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」とうたっていて、一般には遁世して優雅な生活をしたように思われようが、その日の食事にも事欠くような状態だったことが事実のようである。

さて、ここから兼好の思想についてのべていくことにする。

唐木順三は、兼好について、「兼好は過激な世捨人の一言芳談を左に置き、王朝趣味を右に置いている。」といている。また保坂弘司は、無常感、王朝趣味、人の道によって支えられていると考えている。

いずれにしても、兼好の思想の根底には、「無常感」がどっしりと腰を据えている。

冒頭でものべたように、兼好の思想は第七段に集約されているように思う。第七段では、要するに、人は単に長生きするだけではなく、限られた時間のなかに生きていることを十分に自覚するとき、今生きている真の「生」の感覚を見出すことができるのだと言っているのである。私は、この第七段を読むことによって、兼好は人間の死生観についてたいへんな見識をもっている人だということがわかったような気がしたのである。また、第四十一段で「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と書いている。ここで私はパスカルのディヴエルティスマンのことも思いおこすのであるが、要するに死という無常の殺鬼が、われわれにいますぐにも襲いかかるかも知れない。人間はそういう不安定な存在なのだと言っているのである。そして、私をもっとも強烈な印象をうけたのは、第百五十五段である。「死は前よりしも来たらず、かねて後に迫れり。」つまり死は前からばかり来ないで、いつの間にか、後ろに肉薄しているのだというわけであるが、ハイデガーの「死を手もとにかきよせて生きる」というまさに実存の思想といってもよい雰囲気をもっており、仏教的な無常観のとらえなおしであるという感じもしてくるのである。

道元の兼好に対する影響についてはすでにのべたが、道元といえは、我々は、「寸陰愛惜」「諸縁放下」を念頭に思いうかべる。

徒然草第九十二段「道を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。況んや一刹那のうちに於いて、懈怠の心ある事を知らんや。なんぞ、ただ今の一念において、直ちにする事の甚だ難き。」さらに第四十九段「老来りして、始めて道を行ぜんと待つことなかれ。……人はただ、無常の身にせまりぬることを心にひしとかけてつかぬまも忘るまじきなり。」このように兼好は「寸陰愛惜」（いま、ここ）の大切さを切々とのべている。

また第五十九段では「大事を思ひたたん人は、去りがたく、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨てべきなり。」つまり、出家入道という一大事を思いたつような人は、捨てにくく、心にかかるようなことの目的を遂げないで、そっくりそのまま捨て去るべきだ、として「諸縁放下」の徹底を呼びかけている。

道元は正法眼蔵弁道語行持の巻のなかに、「いま仏祖の大道を行持せんには、大隠小隠を論ずることなく、聡明鈍癡をいふことなかれ。ただながく名利をなげすめて万縁に繫縛せらるることなかれ。光陰をすごさず頭然をはらふべし。」と書いているが、ここに至って道元が兼好の師であることを深く納得させられるのである。

小林秀雄の言のように、徒然草を正しく読むことはたいへんにむずかしいと思う。もっと深く読みこんで、兼好の内面に今以上にはいりこんでいくことが、これから

の私の課題だと考えている。

（青森県庁児童家庭課長補佐

昭和三十七年文理学部卒）